太陽が赤なんて誰が決めたことだろう

速川 雪麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽が赤なんて誰が決めたことだろう

【Nコード】

N2647BA

【作者名】

速川 雪麻

【あらすじ】

何千年も前から移動を続け、どこからも影響を受けない民族
そんな民族に生まれた少年は、常識、に疑問を持った

成長するなかで少年はどんな答えを見出すのか

しあいのし (前書き)

一ページ目は小説ではなく、挨拶です
読まなくても良い方は、飛ばしちゃって下さい！

1つめいれし

はじめまして

速川雪麻と申すものです

題名について、簡単に言うと「常識は誰が決めたんだ?」という事です

ありきたりで面白くない小説かもしれませんが、宜しくお願ひします

・作者について

知つての通り速川雪麻です

性別は御想像にお任せします

年齢も御想像にお任せします

アガサ・クリスティーさん、重松清さんの小説を好んで読む人間です
少し書く内容と、更新頻度に偏りがあります

・小説について

あらすじは書くと面白くなりそう……ですであらすじのあらすじを

少年が自分の生きている少数民族という社会で常識について疑問に
思い、其れを解いていくという分かりにくい内容です

多少DQNネームが出るかもしれません

しあいのし (後書き)

次の話より、小説です

第一話 選ばれた子の名前は……

「エルバを」

族長 ユク は名前を呼んだ

しかしこの民族内にエルバ、という人間はいない

「ユク様、エルバという人間は此処には……」

「この間、子供を授かった女がいたろう……あやつを連れてこい」

付き人は威勢良く返事をし、テントを走って出ていく

此処はフルト油国の西の端の砂漠、フルタリア砂漠の真ん中である
周りには砂が広がり、吹く風は砂を運んだ

一年前、此処を目的地としてこの民族はフルト油国の隣国、アルセ
リア海国を旅だった

そして今日、ここにたどり着いた

一年ぶりにゆつくりとした睡眠をとれる事に、皆喜び、早々と寝て
しまった

そんな中、ユクは一人、占いをしていた

「連れてまいりました」

付き人はテントの布扉を巻いて上にあげ、女を通した

その女はこの民族特有のキャラメルに似た茶色く美しい肌を持って
いた

しかし一つだけ違うのは眼の色だった

「こんな恰好で失礼いたします、ユク様」

「いや、こんな時間に呼んだ私が悪い」

ユクは水晶をしまい、座り直す

そして付き人に、席をはずせ、と命じ姿が見えなくなったところで口を開いた

「おぬしの腹の子はすでに名前が決まっておった様じゃ」

「といたしますと……」

「旅の神が直々に名を下さった」

「そんな……恐れ多い……」

女は涙を浮かべる

この民族　ロガ　は旅の神を信仰していた

その神に名前を付けてもらう事はこの上ない幸せ、とみなされていた

ロガの中でも数えるほどだという

「エルバ、じゃ」

「由来はどのような……」

「旅の神の父の名前だそうだ」

「そんな……まあ……」

女は眼をぱちぱちとするばかりだった
相当喜び、驚いているのだろう

「話はこれだけだ、すまないな夜遅く」

「いえっ！　ありがたい事をお教え下さいましてありがとうございます
ます！」

「そうか、早く生まれるとよいな」

ユクはニコリと笑って付き人を呼んだ
付き人に女を送らせるつもりだった

第二話 選ばれた子の母は……

その日の明け方出産が始まった

女の陣痛が酷いものとなり、ついに生まれる状態に至ったのだ

夫はいない

一年の旅の間に、女を造り、逃げた

其れも町へ

ユクはその男を見つけ、砂漠の乾いた木に愛人と共に張り付けた
その後一週間、ハゲタカにゆっくりと内臓を食われるという、残酷な刑に処した

結局、女は一人で出産に臨むこととなった

*

女は死んだ

子供は元気だった

しかし女は疲れがなくなった瞬間、眠るよつに息を引き取った

「ユク様……」

「仕方ない」

ユクはそう呟いた

たまに居るのだ

まるで、眠るよつに死んでしまう、そんな急性の病気を発症し、死ぬ女が

「わしの娘に育てさせよう」

赤ん坊 エルバ はユクの娘に育てられることとなった

第三話 義母と義理の息子は……

ユクの娘はエルバの事を実の息子の様に育てた
そのためか、とても優しい少年になった

「ねえ、お母さん」

「なんだい、エルバ」

ユクの娘が40歳、エルバが10歳の時だった
無垢な笑顔でエルバはユクの娘を呼んだ
それにユクの娘も笑顔で答えた

しかしその問いは決して笑顔で答えられるものではなかった

「本当のお母さんはどこに行ったの？」

無垢すぎて傷つけられない
透明なガラスのようだった

だから、答えられない

「エルバのお母さんは私だけよ」

「ううん、ユク爺から聞いたもん！ 僕には……」

「静かになさい」

「本当のお母さんが」

「静かになさいと言ってるでしょ」

「いるって……」

「静かにしなさいっ！」

平手でエルバの頬を打った

赤く頬が染まる

涙が瞳にたまった

「いい！？ 今度そんな事を聞いたら……」

ユクの娘は自己中心的すぎた

彼女はわがママが過ぎたのだ

「ユクに頼んで、殺してもらいますからねっ！」

少年に対して、最も辛い一言だった

第五話 双子の仲は……

エルバとユクの娘 リク の家の隣には家族が住んでいた
その家族には女の子の双子がいた
ネロとホロだ

エルバと双子は仲が良かった

「エル君っ！ 遊ぼう！」

「エルバは私と遊ぶのっ！」

エル君と呼ぶのが妹のホロ、呼び捨てにするのが姉のネロだった
二人とも性格が正反対だった

ネロは砂漠を駆け回り、夕方までオアシスを探して駆け回る
ホロはテントを貸し切ってお飯事だとか、読書をする
どちらかと言うとエルバはホロの方が好きだった

「今日は皆で遊ぼう？」

「いや！ ネロはずーっと走りまわってるんだもの」

「私だってホロとお飯事は嫌！」

「……じゃあ、僕が決めていい？」

はじめてエルバが意見を出したことに双子は驚いていた

今までは為されるがままだったから

「うん！ エル君は何がしたいの？」

「12時まではお飯事、そのあとは鬼ごっこ」

「そっか！ 朝とお昼でやることを分けたらよかったんじゃない！」

感心したようにネロは笑う

ホロもやつと理解したらしく驚いていた

「ねえ、エル君！」

「んー」

「大人になったら、私とネロ、どっちを選ぶ？」

「どっちだと思っ？」

曖昧に言葉を濁す

答が決まらない

どちらかと言えばホロだ

だが、ネロがいる前では言えなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2647ba/>

太陽が赤なんて誰が決めたことだろう

2012年1月7日09時49分発行